
独りから始めよう

北川 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独りから始めよう

【Nコード】

N5115J

【作者名】

北川 圭

【あらすじ】

母親から疎まれている女子高生の聡美は、早く大人になって家を出たいと願った。

家族の中で独り、独りぼっち。食べるものも服も用意されず、身体には酷い傷。

孤独感を抱えた彼女が、学校を抜け出し独りで行ったカラオケボックスで出会ったのは、車いすに乗った少年の蓮だった。

喪失感を抱えたままの二人は、それでも前に進むことができるのだ

ろうか。

家族からの心の傷と、取り戻せない身体の傷。すべてを包み込むように彼は歌う。

再び歩き出すための青春小説です。

#1

#1

鏡に映った自分の顔、そこから視線を下へずらしていく。

首、肩、首と肩をつなぐ……鎖骨。聡美はそつと肩に手をやった。怖くて痛くて、とても直に傷口へはさわれない。

本当なら、水をはじく若々しい肌が光るはずの右のデコルテに、大きくついた幾筋もの醜い縫い目。

聡美は寒さだけではなく、何かを感じて体を震わせた。

水だけのシャワーは泡が立ちにくい。もうお湯なんてとつくに止められている。立たない泡を無理矢理かきむしるように身体にこすりつけていく。

コンビニのバイトから帰ってきた深夜、聡美はなるべく音を立てないように身体を洗った。

真夏でなければ水は冷たい。それでも入らないより良かった。隠しておいたタオルで水気を取る。

聡美が使えるドライヤーはこの家にはない。そうだ、今度のバイト代が入ったら買おう。家族が寝静まる中、そつと自分の部屋に戻る。ドライヤーを買うのがいいか、それとも自分専用のシャンプーとリンスを買うのがいいか。聡美はしばらく迷った。でもきつと、バイト代は食費に消える。

これ以上家族に内緒でバイトを増やすのは難しい。もっとお金があったら、ここを出て独りで暮らせるのに。

独りで。なんて甘美な響き。

家庭に無関心な父親も、冷たく当たる兄妹も、聡美への一切の世話を放棄して狂気の瞳で見つめるだけの母親もいない、たった独り。十七歳なんてもういやだ。早く年を取りたい。大人になりたい。聡美は、ここ数年一度も干されていない冷たい布団の中で、身体を丸めてそう願った。

「ねえ、やっぱにおうよね」

「かんべんして欲しいよ、清潔は基本だよ。ってかマナー？」

自分では精一杯洗ったつもりだった。でも生乾きの髪ではやはりダメだったのか。聡美は後ろの席から聞こえよがしにつぶやく苑子たちの声に、身をすくめた。

特待生授業料免除に引かれて入った私立高校は、華やかな巻き髪やネイルやファンデーションの香りが似合う女の子ばかりだった。

着替えもろくにない、シャワーも毎日浴びられない聡美のような人間は、誰に何を言われるわけではないが浮いていた。

そう、誰も直接は言わない。そのくらいの分別はあるらしい。だが聡美は独りだった。独りで生きていくのを切望しながら、実際に孤立してしまうのは、いくら家で孤独には慣れているはずの聡美でも、ひどく堪えた。

がたん。我慢できずに席を立つ。

「すみません、具合が悪いので早退します」

あっけにとられていた教師を残して、聡美は足早に教室を出ていく。行く当てはない。バイトが始まるのは夕方六時。どこで時間をつぶそうか。聡美はため息をついた。

「ご利用時間は。おひとりですか」

そんな店員の問いかけに、指を二本立てて曖昧にうなづく。二時間と意思表示したつもりだけど、伝わったのだろうか。

昼下がりのカラオケボックスは人もまばらで、制服姿の聡美はちょっとだけ後ろめたい思いにかられた。

こんな昼間に独りでいられるところなんて限られている。独りでカラオケをすることを、ヒトカラって言うんだって。ネットの掲示板で知った知識。

行くところがないとなると、聡美はよくカラオケに行った。歌いたい訳じゃない。独りでいられるところなら、どこだっていい。

店員は独りの客なんか慣れているようで、伏し目がちに伝表に書き込むと、ドリンクバーのでかいコップを聡美に差し出した。

ヒトカラはおんなじ店に行きにくい。通りの向こうも、駅の反対側ももう行ってしまった。公園の横のここは、初めて入る店だった。

「ちつくしようにふざけんなよ。いいかげんバリアフリーにしろよ」

向かい側で、車椅子に乗った男の子がドアを叩いている。入り口のほんのちよっとの段差が、どうしても上がれないようだった。

「おさえててやろうか」

お節介かと思った。店員を呼べよ、とも思った。でも何だか放っておけずに聡美は自分の部屋に入る前に、彼のところへ寄っていった。黒くて車輪が少し傾斜している車椅子は、前にテレビで見た身障者バスケの人たちが使っている物に似ていた。ちよっとかっこいい。

男の子が顔を上げて聡美を見る。ショートレイヤーを金髪にして、右耳には三個のスタッドピアス、左側にもフープを一つ。

細面の輪郭に黒く光る瞳。強い意志を持ったその目が、聡美をじっと見つめた。

身体にぴったりとした黒いシャツに細身のデニム、膝のところは大きな破れ目。こげ茶のウエスタンブーツが、車椅子の足置き場に行儀よくそろえて置かれている。

パンクロックのボーカル、バイク乗り、どっちだろう。

「すごい根性、そこまでして歌いたいわけ？ けが治るまで我慢できないんだ」

思わず聡美の口からそんな言葉が出てしまった。治療中にも来るぐらいだから、よっぽどカラオケが好きに違いない。そう思ったのだ。

だが、彼は口元をゆがめると、薄く笑ってこう言った。

「治らねえもん、一生」

「えっ？」

聡美は驚いて彼を見返した。何と言ってフォローしたらいいのдар

う。心の中に動揺が広がる。しかし彼はそんな聡美の言葉にも傷ついている様子もなく、明るい声を出した。

「背骨折ってるからほとんど足動かないの。脊損つつうんだけど知ってる？」

「……知らない。ごめん、変なこと言って」

聡美は素直に頭を下げる。彼はけらけらと乾いた笑い声を立てた。

「そっちもさ、火曜日の一時に制服でヒトカラ？ もろサボりバレまくり。」

「けっこうキテンじゃん。どう？一緒に歌わない？」

「絶対にやだ」

彼の軽いノリに、反射的にそう返す。あとは無言でドアを開けてやると、聡美は後ろも見ずに個室へと戻っていった。関わり合いを持ちたくない。面倒はごめんだ。

でも、独りで歌っていると嫌でも向かいの部屋が目に入る。個室の小さな窓からでも、彼が手慣れた様子で次々と曲を入れ、真剣な様子で歌っているのが伺える。向こうはこっちのことなんか、気にもしていないようだった。

三十分も経っただろうか。聡美は二曲しか歌えなかった。曲の合間に流れる広告が耳につく。どうせ歌が目的じゃない。うまく時間がつぶれればいい。

気づくと、向かいの彼がドアを開けようとしていた。手にはグラス。ドリンクバーを取りに行くつもりだろうか、無理せず店員を呼べばいいのに。

案の定、独りでは車椅子がなかなか出せないでいる。やっぱり放っておけない。聡美はため息をついて立ち上がった。

「サンキュ。悪いね」

彼が人なつこい笑顔を見せる。店員呼びなよ、との聡美の言葉に、いくら呼んでもちつとも来ねえし、と言い返してきた。

「おさえててやるよ。っていうか取ってきてやる。何飲みたいの？」

「じゃあ、ウーロン茶。氷三つ入れてね」

取りに行く聡美の背中に、ストローもね、と呼びかける。ちょっと馴れ馴れしいんじゃない？ 聡美はほんの少し笑った。

彼の部屋に戻ると、だいぶ前にはやったスローバラードを歌っているところだった。よく響く甘い声。音程も正確で高い声もしっかり出ている。何より、ニュアンスの付け方がうまい。

グラスを置いて帰ろうと思っていたのに、気づくと最後まで聴き入ってしまった。何だかしゃくにさわる。歌い終わった彼はまるで本物のボーカリストのように、そっとマイクを置いた。

「上手だね、バンドでもやってるの？」

まさか、彼が目を伏せる。ちょっとだけ表情がかげる。でも顔を上げた時にはもう、さっきの笑顔に戻っていた。

「車椅子なんかでステージ出てったら、客どん引きじゃね？」

わざとなのか、あっけらかんとした声。

「何で？ドラムやるのでもダンスするわけでもないでしょ。歌うだけなら関係ないじゃん」

心からそう思って言ったのに、彼は寂しそうに笑うばかりだった。黙ってリモコンをいじっている。

聡美は彼からそれを取り上げると、勝手に数字を打ち込んだ。さっきの歌手の他の歌。彼が驚いて聡美を見る。

「もっと聴きたい。歌ってよ」

彼はその言葉に、にっこり笑うとマイクを手を取った。

(つづく)

#2

#2

彼は、蓮と名乗った。

それから毎週、聡美はここで蓮に会った。しょっちゅう早退するわけにもいかないから、集合時刻は三時半にした。

それだって六限が終わるとぎりぎりだ。息を切らせて店に着くと、いつも蓮は入り口で頬杖をつきながら待っていた。

学校には行ってないの？ 聡美の問いかけに、火曜日はリハビリで必ず欠席、出席日数足りねえかも、と笑って言う。

「そのけが、バイクでこけたの？」

「違う。雨でスリップして、母さんの運転してた軽が横転した。おれは車の外に放り出されて」

お母さんは？ 思わず聡美がそう訊く。

「かすり傷。おれは母さんが無事でうれしかったのに、本当にうれしかったのに、事故からずっと、おれを見て泣くんだ」

「優しいお母さんなんだね」

きつと想像もできないくらい辛い思いはたくさんしたのだろう、でもどこかうらやましい。言葉には出せないそんな思い。聡美はその感情を飲み込んだ。

「家におれがいると、母さんは気が休まんないと思う」

「それでここに来るの？」

「おまえは？」

聡美はちよつと黙ってから、言葉を選んで話し出した。

学校の誰にも言えないことを、蓮には言える。お互いよく知らないからこそ、本音が言えるのかも知れない。

幼い頃から他の兄弟と全く違う扱いをされてきたこと、母親が自分に対してだけ恐ろしい目で見ること、何一つ世話をしてもらえずに、家族の中で独りぼっちでいるということ。ぽつりぽつりとそんな話をした。

そんなの聡美のせいじゃない、蓮の声は優しくかった。

「ううん、あたしに可愛い気がないから。きっとそう。どんくさくて醜くて、何となく気にいらないんだと思う」

母親が狂うのは、あたしを見る時だけ。ならきつとあたしに問題があるんだろう。聡美は涙をこらえてそう言った。

あたしが妹みたいにかわいかったら、兄みたいに勉強ができたら、とぎれとぎれにつぶやく。

「聡美は、そのままでいい」

わざと素っ気ない、蓮の言葉。二人は黙った。

メインボーカルの声をなくしたメロディーだけが、部屋を満たしていく。

ここは誰も来ないから、誰も二人を責めたりしない。聡美は深く息を吸い込んだ。

何度目の火曜日だっただろう。その日は雨で、それでも二人はこの部屋に来た。

車椅子に大きなレインコートを掛け、タイヤを雨で濡らしながら。いつもならこんな無茶しない、蓮は笑ってそう言った。

「これ」

蓮が細長い箱を取り出した。ラッピングにピンクのリボン、それを引っ張って中身を開けてみる。銀色に光るネックレスだった。

「いない」

聡美は素っ気なく突き返した。顔が思いがけずこわばる。それを蓮はどう勘違いしたのか、あわててこう付け加えた。

「別に特に意味があるわけじゃないよ。あのな、たまたま人にもらったから、それで」

そんなことじゃない。特別な意味があると思ったわけじゃない。聡美にとって、ネックレスは悲しみの象徴。

「あたし、つけらんないの」

「なんで？金属アレルギーかなんか？」

「鎖骨のところに大きな傷跡があつて、そこに当たると痛いんだ。だから襟ぐりの開いた服も着られないし、タンクトップもキャミソールも、全部ダメ」

だからいつも、ハイネックの格好悪いTシャツ。制服の下からはみ出しているけどどうしようもない。

口さがないクラスの連中が何か言ってるのも知ってる。一番酷い時は下着もつけられなかった。誘ってんじゃない？そう陰口をたたかれたこともある。

この傷は一生残る。痛くて痛くて、女の子らしい服装が何も出来ないのが悔しくて。

黙ってしまった聡美に、蓮はそっとさっきのネックレスを差し出した。聡美の左腕を取ると、手首にそれを二重にして巻き付ける。苦心して留め具をはめると笑顔を見せた。

銀の鎖の上に、蓮が大きな手のひらを乗せる。聡美は顔を上げて彼を見た。唇をきゅっと結び、口角を無理に上げる。

笑いたかった。でもそれは難しいことで、聡美の両目に涙がたまる。

あの時の痛みと苦しさ、幼かった自分ではどうしようもできないという無力感がデジャビュのように襲ってきた。

「部屋の中で転んだの」

「ドジ」

蓮が微笑む。不思議といやではなかった。逆にあったかくて、何でも話せそうだった。誰にも言っていなかった、言っていけなかった、あの時の記憶。

「母親がね、突き飛ばしたんだ。小さかったあたしはふっとばされて床に肩をぶつけて」

骨が折れた。聡美はそのまま放っておかれた。夜、父親が帰ってきて救急車を呼ぶまでは。痛みで泣き叫んで、その声も枯れて、涙が水たまりを作るまで泣いて。

すぐに手当をしなかった鎖骨はねじ曲がり、普通の処置では対処できなくなっていた。

手術をしてボルトを埋め込んで、皮膚には大きな傷跡が残った。他の人なら何でもない傷かも知れない。でも聡美は敏感な体質らしく、布が触れるだけで痛みが走った。

もう何年もたつのに。きっとおそらくこのまま一生。

家なんか出るよ、蓮がつぶやく。まだそんな母親と一緒にいるの？と。

「だって家にいれば、ご飯は食べられる。夜寝るところもある」

たとえばそれが、家族の目を盗んで独りで食料をあさるのだとしても。冷え切った布団にそっと身体を横たえるだけだとしても。

「おれが普通の男だったら、おまえをそっから引っ張り出してやるのに。一緒に住もうって、言っていられるのに」

蓮はそう言うのとグラスを揺らした。溶けかけた氷が音を立てる。誰も歌わないカラオケボックスの小部屋は、まるで地下室の無音スタジ奥のようだった。自分たちの他はお客もいない。いろんなものから取り残されて、今はただ二人。

「初めて、悔しい。脊損じゃなかったらって。事故からずっと、思ったこともなかったのに。おれに聡美を救うだけの力のないのが悔しい」

「そんなこと、ないよ。蓮といるとほっとする」

救われる。蓮の言葉一つ一つが、心の中にしみていく。手のひらの温かさが聡美の心を溶かしていく。家でのことも学校でのことも、何もかも忘れられる。

「おれはできないから、男として愛してやることができないから、これから先もずっと独りで生きてかなきゃならない」

「するだけが愛することじゃない」

「聡美に触りたい、手をつなぎたい、肩を抱きたい、頬を寄せたい、髪を触りたい、それから…」

「それだけでいい。それだけで十分。その先なんていらぬ。そばにいらぬだけでいい」

蓮が両腕に力を入れて身体の方きを変える。蓮の顔が目の前にある。蓮がそつと手を伸ばし、聡美の頬を包み込む。そのまま引き寄せる。唇を触れ合わせるだけの、やさしいキス。

ハイネックの端をそつとずらし、蓮は首筋にもキスをする。聡美の身体がびくりと震えた。怖い。まだ傷口には遠いのに、痛みが走る。蓮はその肩を抱きかかえ、自分の胸に聡美の顔を押しつけた。

「痛い？」

聡美はかぶりを振る。本当は痛くて怖くて、傷口が疼くものだけれど、今はこうしていたかった。蓮の体温が伝わってくる。鼓動も聞こえる。聡美はそつと目を閉じた。

これ以上先には進めない二人に、雨音が優しく響いていた。

(つづく)

#3

#3

「いらっしやいませ」

休憩が終わると、聡美はさつと髪を束ねてレジに入った。聡美はこのコンビニで夕方六時から十時まで働いている。どこことなく上流志向の苑子たちにばれたら、なんて言われるだろうか。でも独りで生きていくためには手段なんて構っていられない。家族がいても、家があっても聡美は独り、いつも独りだ。

高校を卒業したらフルタイムで働けるのに。あと一年、そうしたら家を出よう。聡美の決意は固かったが、どこかそれは現実味を帯びない絵空事のように思えてならなかった。

あたしを拒絶するくせに、あたしをとらえて離さない家族たち。本当にあの人たちから逃れて自由になれるんだろうか。心の中に広がったいつもの不安を、頭を振って必死に追い出す。

夕方の混雑が一段落し、客足がいつとき途絶えた。聡美は何の気なしにコンビニの大きなガラスドアに目をやった。

がちゃん。何かがドアに当たる。金属の音がした。

一緒に組んでいるバイトの大学生が、気配を察してドアの方へと向かう。誰か大きな荷物でも持ち込もうとしているのか、それともまさかコンビニ強盗でも来たというのか。

ほんの少し緊張が走る。いつもと違うものには誰もが敏感だ。

大学生がドアを大きく開ける。手を差し出している。何をしているのだろう。

レジのカウンターから身を乗り出した聡美は、次の瞬間固まってしまった。

蓮だ。

でも車椅子がない。

そこには蓮が立っていた。

右足には太腿のところで膝、そしてくるぶしにぐりと回した銀色の金具が見える。それを革と金属のベルトでつないでいる。

足元には普段履いている靴を囲むかのような、肌色のカバー。プラスチック製のそれは、さっきの金具とボルトで留められている。左足には、やや短めの同じような装具。

両手に金属製のクラッチを持ち、腕の力で地面をしっかりとらえている。かなりの力が必要なだろう、立っているだけなのに息が切れている。

黒の上下のトレーニングジャージは擦れてあちこち汚れている。ひじにも膝にも分厚いプロテクター、頭に革製のヘッドギア。

あんなにおしゃれに気を遣っていた、いつもの蓮じゃない。

だけど、両足で立っている蓮は、そんな自分の様相が誇らしげで、

自信ありげで、とてもかっこよかった。

「どう、したの？」

入り口までかけより、やっこのことで聡美が声をかける。蓮はにっこりと笑った。

「死に物狂いでリハビリした。どうしても一度立ってみたくて、おまえに見せたくて。おかげで全身あざだらけだ。先生は無茶だって言っただけ、おれ頑張ってみた」

バイト仲間はそっと控え室へと戻っていった。それに聡美は頭を下げる。

「どうして急に、そんなこと」

「一度でいい、ステージに立ちたい。歌ってみたい。聡美に聴かせたいと思ったんだ。軽音部の連中にはもう頼みである。来週の月例ライブに出さしてもらえることになった。だからおれ」

蓮は息を切らせながら、クラッチにすがりついた。笑顔は途切れないうい。

「もう歩けるの？」

「まさか。歩道から店に入るのがやっとな。前の道路まで車で来た。ちょっとかっこ悪いけどな」

聡美が道路の方に視線を送る。白いワゴン。その前に心配そうな顔の女性、蓮のお母さんなんだろうか。聡美はもう一度蓮の方を向いた。

「かつこ悪いわけない」

胸が苦しくてそれ以上言えなかった。精いっぱい涙をこらえる。ほんの少し背伸びして、蓮の髪にそっと手をやる。本当はこんなに背が高いんだ。聡美は驚いた。

「ステージ、見に来てくれる？」

聡美は何度も何度もうなずいた。

聡美は初めて蓮の学校に足を踏み入れた。紺のブレザーにグレーのズボン、女の子はチェックのスカート。制服達がまぶしい。聡美は自分の着ているセーラーカラーの裾を引っ張り直した。夕べはシャワーも浴びられた。髪もきちんとかしてきた。バイト代で買ったコンビニ売りのコロン。今日は大丈夫、自信を持っている。

中庭の端に、一段高くなっている急ごしらえのステージがあった。PAの機材があちこちに並ぶ。前のバンドが終わったばかりのようで、何人もの生徒達がステージの上をうろうろしていた。

中央にイスが運び込まれる。マイクの位置が少し下げられる。もう一本のマイクの前には長身の男の子が立って、チェックをしている。

聡美は、まるで自分がステージに上がるかのようにときどきしてきた。手を胸の前で組む。

楽器のセッティングが終わり、男の子が手を上げる。蓮がない。このバンドのはずなのに。でも曲は無情にも始まってしまった。

きれいな声の明るい歌。でも、蓮の方がずっとうまい。聡美は辺りを見回す。

ステージの脇に見慣れた黒いスポーツタイプの車椅子が見えた。周りと同じ紺のブレザー、ズボンにはあの時に付けていた装具。蓮だ。

蓮がゆっくりと立ち上がる。

時が止まってしまったかのようなスローモーションの動きに、聡美は目が離せなくなっていた。曲は進む、もうエンディングにさしかかる。

蓮は他の人から手を添えてもらいながら、ステージのほんのわずかの段差を自分の足で乗り越えた。一歩ずつ確かめながら、センターに向かって歩き出す。

聡美は祈った。

イスの所まで来ると、蓮はほうっと息を吐いて腰掛けた。右手を伸ばしてマイクを自分の口元にまで近づける。そして歌い終わった隣のボーカリストに笑いかける。

プロテクターにヘッドギア、たくさんの金属の装具で覆われた両足、おおよそ制服には似合わない重装備。それでも蓮は笑顔だった。

次の曲は特別ゲストの彼が歌います、こいつおれより歌うまいから、やなんだよね。男の子が苦笑いしながら蓮を紹介する。れんー！客席から声が飛ぶ。

蓮はそれに手を振って答えてから、ドラムスの方をふり返った。カウントが出る。

蓮が歌い出した。初めて会ったあの時聴いたスローバラードだ。

優しくて甘くて、心にしみていく歌声。いつしか周囲からざわめきが消え、蓮の歌う声だけが響いていった。

聡美は耐えきれずにうつむいた。涙が止まらなかった。それでも必死に顔をあげようとした。蓮のステージを見ると約束したのだから。

蓮が歌っている。

独りぼっちのカラオケボックスじゃない。二人きりの閉じこめられた空間でもない。

ここには大勢の人たちがいて、みんな蓮を見つめている。蓮の歌を聴いている。

蓮は歩き出したんだ。確実にその一步を。自分の足で。

歌い終わり、ステージを降りた蓮に、聡美は駆け寄っていった。黙って自分の左手を差し出す。そこにはあの日、蓮がつけてくれたブレスレットが光っていた。

蓮はいつものように車椅子に座り、聡美を見上げた。同じように手を伸ばし、聡美の腕に重ねる。それに勇気づけられるように、聡美は言った。

「卒業したら、家を出る。必ず出る。あたしはいつまでも傷つけられる存在のままで、いたくない」

蓮が頷く。瞳が温かい。

「あたしがあたしでいられるところが、どこかにあるはず。そうでしょ、蓮」

独りから始めよう。孤独とは違う。たった独りで自分の足で歩き始めよう。

そしてその先に、いつかそこに、あなたが待っていてくれるのなら。

蓮がもう一度立ち上がる。両腕に力を込めて、息を切らせて。

聡美は蓮の背中に腕を回すと、胸に顔を押しあて、彼を包み込んだ。

<了>

北川圭 Copyright? 2009-2010 keik
tagawa All Rights Reserved

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5115j/>

独りから始めよう

2010年10月9日12時34分発行